



## 能忍寺たより

## 行事紹介

## ○除夜の鐘

除夜とは大晦日のことをいい、新しい年を迎えるという意味を持ちます。鐘を撞くことで古い年を取り除く意味があり仏教行事の一つとされています。一般的に鐘をつく回数は一〇八回と言われています。これは一〇八個の煩惱の数とされており、諸説ありますが、それを取り払おうと願い、一〇八回鐘をついていきます。また鐘の音には邪気を払う力があると言われており、金の音を聞いたものはあらゆる苦しみから開放されるとされています。除夜の鐘は、鐘をつくだけの行事だけではなく、除夜会という法要の一環として行われています。この法要は一年のしめくりに自身の行いを見つめなおし、悔い改め、新年の幸福を祈るものです。宗派や地域によって、年末の行事はいろいろあるので、ぜひこの機会に寺院を訪ね、一年の締めくくりに、今年のできごとを振り返ると来年も気持ちよく過ごせそうですね。

## 今月のことば

## く九年面壁く

一つのことに対して専念し辛抱強く、長くにわたり心を傾けること。諸説ありますが、由来は達磨大師が嵩山の少林寺で修行の際に、絶壁に面して九年も坐禅を組んで悟りを開いたという故事から来ています。九年とは言わずとも、皆様には長期間にわたって没頭できることはあるでしょうか。今の時代には、モノも情報も溢れかえっていますが、ひとつでも根気よく続けられることがあると、達磨大師が悟りを開いたように、何か学びを得られるかもしれませんね。

## コラム あれもこれも仏教用語

## ○愛嬌

「にこやかで、かわいらしいこと」「人間の魅力的な性質や振る舞いなどを指す言葉である「愛嬌」という言葉も由来は仏教からだという説があります。もともとは「愛敬(あいぎょう)」と書かれ、仏様のお顔立ちが穏やかで恵み深いことを表しています。仏教では仏様や菩薩のやさしく慈悲深い相を見て、誰もが知らず知らずのうちに敬愛し、微笑んでしまうような相を「愛敬相」といいます。また人々の融和を祈って、互いに愛し敬う心を起こさせる行動を「愛敬法」といいます。

室町時代頃から、清音(濁音や半濁音をつけない仮名文字であらわす意)での「あいぎょう」が用いられるようになり、中世後期頃には清音での発音が主流となったといわれています。この頃から「敬」の意味も薄れ、代わりに「可愛らしさ」「艶めかしさ」などの意味を持つようになり、「嬌」の字が当てられて「愛嬌」となりました。

## はじめての仏教

## ○涅槃寂静

この世の全てのもものは移り変わり(諸行無常)、身体や心さえも自分の思い通りにはならない(諸法無我)。これを真理として受け止め、四苦八苦に満ちた世界(一切皆苦)を超えた理想の境地である「涅槃寂静」を目指すのが仏教の教えです。お釈迦様は自ら涅槃寂静の境地に達し、誰もがそこに到達できる方法を説き明かしました。

「涅槃」とはサンスクリット語の「ニルヴァーナ」の訳で「吹き消す」という意味があり、燃え盛った煩惱の火が吹き消された穏やかな状態を表します。「寂静」は涅槃の別名でもあり、煩惱や迷い、苦が消え去って静かになった穏やかな安らぎの境地のことをいいます。苦に満ちた世界から抜け出すことを「涅槃に入る」「解脱する」「悟る」と呼び、抜け出した後の安らかな状態を「涅槃」「悟りの境地」と呼びます。

お釈迦様が亡くなることも「涅槃」又は煩惱や肉体の束縛から離れた完璧な涅槃という意味の「般涅槃」と称します。ニルヴァーナは「滅」とも訳されるため、お釈迦様が亡くなることを入滅ともいいます。

「諸行無常」「諸法無我」とこの「涅槃寂静」を合わせて「三法印」と呼び、お釈迦様の教えの旗印として、仏教の最も基本的な教えとされています。ここに「一切皆苦」を加えて「四法印」と称することもあります。